

シロ・クロ物語

豊島与志雄

青空文庫

一 公園の占うらなひ師

南洋のある半島の港です。太陽がてりつけて、暑い、けれどさ
はやかです。木がこんもりとしげり、椰子やしや棕櫚しゆうろが、からかさの
やうに葉をひろげて、いろんな花がさきほこつてゐます。

その港町の、公園の木かげに、みごとな白い髯ひげをはやしたお爺じい
さんが、ぢめんに毛布をひろげて、占うらなひの店をだしてゐます。まは
りには、おほぜいの人があつまつてゐます。

このお爺さん、占といふのはついたりで、じつは面白いことを
してみせるのです。十日に一度くらゐでてくるのですが、町の人
たちはよく知つてゐて、薬屋の爺さんとか、白髯しろひげの爺さんとか

いつてゐます。薬屋がしやうばいで白髯があだ名です。

「さあ〜、そんなによつてきちやいかん。」とお爺さんは人々にいひます。「これからいよく見とほしの術……うまくあつたら、いくらでもよいから金をおいていくんだ。あたらなかつたら金はいらん。……おうこれ〜、シロちやんクロちやん、お前たちはひつこんでゐるんだ。」

シロちやんにクロちやん、それは猫ねこのことです。まつ白な猫とまつ黒な猫で、いつもお爺さんがつれてゐるのです。これがあやしいのですが、たかが猫のこと、見物人たちは気がつきません。

そこでいよく見とほしの術……。お爺さんは、木の箱をとりだして、それを毛布の上にふせます。

「さあ〜、この箱の下に、なんでもよいからかくしなさい。わしが外から見とほして百ぱつ百ちゆう、ぴたりといひあてゝみせる。世にもふしぎな見とほしの術……。さあ〜誰かだれやつたやつた。」

お爺さんは、くるりとうしろをむいて、そのうへ両手で目をふさぎます。

一人の子供がでてきて、箱の下に物をかくします。見てるのは、見物人たちと、シロとクロの二ひきの猫だけです。

「もうよろしいか。」と爺さんはたづねます。

「よろしいよ。」と子供が答へます。

お爺さんはむきなほつて、じつと箱を見つめます。そしてちら

と、シロとクロの顔を見ます。シロとクロもお爺さんの顔をちらと見ます。お爺さんはまた箱を見つめます。

「ははあ、つまらないものをかくしたな。石ころが二つ。どうだ。」

子供は頭をかいて、箱をとります。石ころが二つならんでゐます。

見物人たちは、笑つたり、よろこんだり、ふしぎがつたりします。

そんなことをなんどもやります。紳士がでてきて、時計をかくします。女がでてきて、ハンケチをかくします。学生がでてきて、ペンをかくします。それをお爺さんはみないひあてます。まつた

く箱を見とほすのでせうか。一つとしてはづれつこありません。

見物人たちはかつさいします。お金をぱらくなげます。

「もうよろしい。そんなにたくさんなげなくてもよろしい。」

お爺さんは、お金をひろひあつめます。

「こんどはおれがやつてみるよ。」

さういつて、一人の男がでてきました。みなりはりつぱですが、目のぎよろりとした。肩はゞのひろい、ひとくせありさうな男です。見なれない男です。

お爺さんがむかうをむくと、男は箱をふせました。

お爺さんはむきなほつて、箱をみつめ、シロとクロの顔をちらと見、また箱をみつめ、そしてちよつと考へました。

「ははあ、ごまかさうとしたね。なんにもない。箱の下には、なんにもかくしてない。」

「ほんとにないかね。」

「ないといつたらない。」

男は両手を箱にかけて、ぱつととりのけました。すると、そこには、ダイヤの指輪がきら／＼光つてゐます。

「は／＼／＼。」と男は笑ひました。「みごとはづれたな。」

見物人たちはあつけにとられました。そんなことははじめてなんです。お爺さんは首をかしげてゐます。

「よろしい、も一度やつてみよう。」

おなじことをくりかへしました。お爺さんはいひました。

「なるほど、こんどはなにかかくしたな。紙のやうなもので……紙幣だ。」

「紙幣……どうかな。」

男はつぶやきながら、箱に両手をかけ、はじめはそつと、そしてぱつと、箱をとりのけました。そこには、マッチが一つころがつてゐます……。

「はゝゝゝ、なか／＼あたるよ、はゝゝゝ。」

男はあざけり笑ひました。お爺さんは考へこみました。それからふきげんさうに立ちあがりました。

「今日は頭のとうしがいけない。まあ、しくじつたとしておかう。しくじつたから、もうこれでおしまひだ。」

そして毛布をまき、シロとクロをだいて、かへつていきました。見物人たちは、ふしぎさうにさゝやきあひました。

白しろひげ髯の爺さんは、薬屋の店にかへつてきました。そしてシロとクロをあひてに……話をした……といふとをかしいでせうか。

じつをいふと、このまつ白い猫とまつ黒い猫、シロとクロは、ひとり者のお爺さんが子供のやうにかはいがつてるものです。猫の方でも、お爺さんを親のやうにおもつてゐます。そしてたがひにしたしみあつてるうちに、猫はだん／＼お爺さんの言葉がわかるやうになり、なほ人間の言葉がわかるやうになりました。そしてお爺さんの方では、猫の目色や顔色がわかるやうになり、猫

の言葉がわかるやうになりました。ほんたうに親しみあふと、人間と動物とでも、たがひに話を通じるものらしいのです。このお爺さんとシロとクロの間が、ちやうどさうなんです。見とほしの術で、お爺さんがなんでもいひあてるのは、シロとクロがついてるからです。見物人が箱の下に物をかくすところを、シロとクロはちやんと見てゐて、何をかくしたかお爺さんに知らせます。だからどんな物でもあたります。

ところが、あの男の時だけは、あたりませんでした。

「たしかに見てゐたかね。」とお爺さんはシロとクロにたづねました。

シロとクロは、たしかに見てゐたのです。あの男は、はじめの

時はなんにもかくしませんでした。ところが、ダイヤの指輪がでてきました。二度めの時は紙幣きつをかくしました。ところが、マツチがでてきました。ふしぎです。

「きつと、ごまかしたんですよ。」とシロもクロもいひました。「なるほど、それにちがひない。」とお爺さんはいひました。

「箱をとりのける時にごまかしたんだ。手つきにあやしいところがあつた。あれは、どうも、悪い奴やつらしい……。」

そして、お爺さんとシロとクロが考へこんでるところへ、ポン公が、いきをきらしてかけつけてきました。

ポン公といふのは、町の広場で、夕刊新聞の立売をして、どうにか暮しながら、ひとりで勉強してるかんしんな少年です。白髯

のお爺さんの友だちで、またシロとクロの友だちです。いつもやつてきては、お爺さんからいろんなこと教はつたり、シロとクロとあそんだりするのです。

「お爺さん、今日の見とほしの術の……あの男、へんな奴ですよ。」とポン公はいひました。

「あゝ、うまくやられたよ。」とお爺さんはにが笑ひをしました。「僕ね、すこしあとをつけてみたんです。ところが、自動車につていつてしまつたから、だめでした。だが、あの男を僕は知ってるんです。今日はあのとほり、りつぱななりをして、ダイヤの指輪なんかもつてましたが、ふだんは、きたないなりをして、漁師みたいなふうをして、海岸でつりをしてるんです。そんな時、

いつも、沖にはれいのあやしい船がついてるんです。きつと、あのあやしい船の仲間ですよ。」

「あやしい船の……うーむ、さうかなあ。」

「ひとつさぐつてみませう。」

「さうだな。それはけしからん奴だ。」

あやしい船……どこからかやつてきて、またすつとでてゆく船です。軍艦のやうな、また商船のやうな、わけのわからない船です。

その船が沖についてる時に、あの男が海岸でつりをしてる……。なにかあひづをしてるのかも知れませんが。

「僕がいくと、用心するかも知れないから、シロとクロをやつて

みませう。」

てはずがとゝのひました。

「しつかりやれよ。」とポン公はシロとクロにいひました。

さて、シロとクロだけで、うまくいくでせうか。でも、シロもクロも喜びいさんでゐます。見とほしの術のかたきうちをするつもりなのでせう。

二 釣つりをする男

港近くの、海岸の散歩場です。いちめんの芝生の中に、砂利の道がほどよくうねつてゐます。いろんな木が、あちこちにうゑこんであります。花も咲いてゐます。海の方は、たかい石垣で、ひ

たくくと小さな波がうちよせてゐます。

朝はやくのことで、散歩する人も見えません。ポン公とシロとクロは、木立のかけにかくれながら、だんくく海の方へやつていきます。

沖の方には、あやしい船がついてゐます。七百噸トばかりのもので、古い商船のやうですが、よく見ると、いかにもがつしりできてるて、軍艦といつてもよいやうです。どこかに大砲などがかくされてゐさうです。そのうへ、水色にぬつてあつて、海水とほとんど見わけがつきません。いつも石炭をたいてゐて、えんとつから煙がでてゐます。すぐにも動きだしさうです。でもじつとまつてゐます。

そして、はたして、海岸の石垣のところでは、あの男がつりをしてゐます。公園の時とちがつて、そまつなみなりで、シャツの上にはレイン・コートをひっかけ、あらい革のバンドをしめ、ゴムの長靴をはいてゐます。

シロとクロがわざとふざけて、かみあつたり、ないたり、かけたりして、男の方に近づいていきます。ポン公は木かげにかくれてゐるのです。

男はしきりにつり竿をうごかしてゐますとき／＼魚をつりあげます。ちやうど満潮で、まん／＼とたゝへた海水のなかに、ぽんとおとした針を、なにか、ぐぐつと引く……そこを、ぱつと竿をあげると、糸の先には魚がをどつてゐます。

みごとな腕前です。バケツの中にはもう、つりあげた魚がいくつもおよいでゐます。

シロとクロはそばまでいつて、バケツの中をのぞきこみ、魚にたはむれるふりをします。だけど、眼はほかの方にむいてゐます。沖のあやしい船と、つりをしてる男とを、かはるがはる見くらべてゐるのです。船には、小さな白い布をいくつもつけた綱が、いつも、する／＼とのぼつたりおりたりしてゐます。なにかの練習でせうか、それとも、なにかの合図でせうか。

つりをしてる男の方も、しきりにつり竿をうちふつてゐます。

ぴゅうぴゅうと、三度ふることもあれば、五度ふることもあれば、四度ふることもあります。

「たしかに、船とこの男と、合図をしあつてるんだな。」

さうシロとクロはさゝやきました。しかしなんの合図かわかりません。そしてじれつたくてたまりません。

「こらく、バケツの中をいたづらしてはいかんよ。」

男は笑ひながらさういひました。だけど、うはべだけ笑つて、なにかたくらんでるらしいやうです。はじめから、シロとクロの方にじろく横目をそゝいでゐたのです。

シロもクロもそれに気がついてゐました。人間の言葉がよくわかり、白髯の爺さんとは話をするこゝもできる猫です。ふつうの猫とはちがひます。

「ははあ、魚がほしいのか。」と男はいひました。「ひとつあげ

よう。」

バケツの中の死にかかつてゐるのを一つ、手でつまみあげて、そこになげだしてやりました。シロとクロはそれをかいでみました。けれど用心をして、たべはしません。

「お前たち、行儀がいゝね。それとも気にいらんのかな。よし：まづておいで、いま、網をもつてきて、うまい魚をしやくつてやるよ。今日は魚のよりがばかにいいからなあ。」

ひとりごとのやうにさういつて、男はむかうへいつてしまひました。シロとクロは顔を見あはせました。

やがて、ゴムの長靴の男は、大きなよつであみ四手網をもつてもどつて

きました。腰にはふとい繩なはをぶらさげてゐます。

「さあこれで、うまい魚をすくふとするか。」

シロとクロには気もとめないふうで、海の方を見てゐます。けれど、横目でじつとやうすをうかゞつてゐるのです。

そして、四手網をもちあげて、ひといきして、ぱつと、シロとクロの上に網をかぶせました……。シロとクロはとびのいて、いつさんになげだしました。

「まてく、こら、またんか。」

男はおつかけてきました。

まてばつかまるばかりです。シロとクロは、力かぎり走りました。男は腰の繩をひきぬいてうちふり、網をひきずつて、どこま

でもおつかけてきます。ひどく足の早い男です。

シロとクロは木立の方へにげていきました。男はなほおひすがつてきます。もうおつかれさうです。そこに、すぐかけの木がありました。それにとびつくと、もうむちゆうで、上の方にのぼつていきました。

男はその木につかまつて、ほつと息をついて、それから木をゆすぶりました。大きな木でびくともしません。男はさげびたてました。

「誰かきてくれー、早く誰か……。どろぼう猫だー。どろぼう猫をつかまへるんだ。誰かゐないかー。」

なんどもさげびたててるうちに、子供が三四人走つてきました。

それまで、木のかげで、はらくくして見てゐたポン公は、もう仕方なく、子供たちといつしよに、そしらぬ顔をして、かけだしてきました。

男は子供たちの肩をたゞきました。

「おゝ、よくきてくれた。あれ見ろ、白猫と黒猫が、この木にのぼつてるだらう。どうも気にはない猫だ。どろぼう猫だ。あれをとつかまへたいから、てつだつてくれ。お礼はするよ。つかまへてくれ。」

ところで、木にのぼつてる猫を、どうしてつかまへたらよいでせう。さすがに男もこまりました。子供たちもこまりました。

ポン公はなにか決心して、進みでました。

「僕が、この木にのぼつてつかまへてみませう。その繩をかして下さい。だけど……強さうな猫だなあ。あぶないから、下からその網を、頭の上にひろげといて下さい。」

「おう、君がつかまへてくれるか。しつかりやつてくれ。」

ポン公は繩をもつて、木にのぼつていきました。シロとクロは、木の葉のしげみのなかにすくんでゐます。

ポン公はだんくのぼつていつて、小声でさゝやきます。

「おい、僕だよ、僕だよ。心配しないでいゝよ。だけど、あぶないげいたうをするんだよ。命がけだ……いゝかい。僕のいふとほりにするんだよ。」

そしてポン公は大きな声でいひました。

「ちきしやう。どろぼう猫……さあしばつてやるから、おりてこい。」

そして下の方にさけびました。

「強さうだよ。あぶないよ。網をしつかりたのむよ。」

ポン公は猫のそばまでのぼつていき、また何かこそくさくさやきました。

そして……シロとクロはふ一つとうなりました。ポン公は繩をうちふりました。両方からいちどにわめきたてました。ポン公の方がにげごしです。だんく下の方におりてきて、その枝をつたつてにげます。シロとクロがおひせまつてきます。そしてとうつかみあつて、ひとかたまりになつて……あぶないげいたう

です……しなつた枝の先から、葉のしげみのなかを、けんたうをつけながら、男の頭の上の網のところ、どつところがりおちました。

わつといふさけび声がおこりました。男はしたじきになつて、網をかぶつてたふれました。子供たちはとびのきました。そのすきに、シロとクロはとびあがつて、いつさんになげていきました。ポン公はよこだふれにもがきあばれて、男をけとばしました。男のポケットからなにかまるいものがおちました。ポン公はそれをすばやくひろつてかくしました。それからわぎと大声で泣きだしました。じつさい、^{ひぢ}肱や^{ひざ}膝をすりむいて血がでてゐました。

薬屋の店のおくには、白髯の爺さんが、心配してまつてゐました。

「たしかに、あの男はあやしい船となにか合図をしてゐましたよ。」とシロとクロはかはるがはる話しました。

それに、ポン公がひろつてきたのは、円いメダルみたいなもので、表に345と三つの字がほりつけてありました。

「これはいゝものが手にはいつた。」とお爺さんはいひました。「あいつらの仲間のかなにかしるしのメダルにちがひない。そこで、こんどは、あの男のすまひをつきとめて、ひみつをさぐつてみるんだね。」

ポン公もシロもクロも、あの男にはらをたててゐました。ポン

公は肱や膝のけががひり／＼いたんでゐます。シロとクロは、われ／＼を魚あつかひにして、四手網でふせようとしたと、ふくれつつらをしてゐます。こんどであつたら、いきなりけんくわになりさうです。

ところが、あの男はもうどこにも姿をみせません。それを、ポン公とシロとクロはさがしまはつてゐます。うまくみつかりますかしら。

三 怪しい家

ポン公と猫のシロとクロは、あのあやしい男をさがしまはりましたが、どうしてもわかりません。ところが、ふいに、その男が

でてきました。

白髯の爺さんが、薬屋の店のなかで、ぼんやり煙草たばこをふかしてゐますと、りつぱな紳士らしい男がはいつてきました。

お爺さんははつとしました。たしかにあの男です。公園の広場で手品をやつてゐたとき、それをじやました男です。海岸で、シロとクロを四手網でふせようとした、あの話の男です。

男はそしらぬ顔をして、店のなかをじろ／＼みまはしました。ポン公もシロもクロもゐず、お爺さん一人です。

「あなたのうちに、」と男はいひました。「どんなきずにもよくきくといふ、ふしぎなねり薬があるさうですが、ほんたうですか

」。

「えゝ、ありますよ。」

それは、白髯の爺さんのじまんの薬でした。昔からつたはつたひみつの方法で、いろんな草や木の根を、ねりあはしてつくつたもので、それをぬりつけておけば、どんなきずでもすぐになほるのです。

「それをたくさんもらひたいのですが……できませうか。」

たくさん……からだの方々につけるとして、百人ぶんばかりほしいといふのです。おほぜい人をつれて、冒険の旅にでかけるので、用心のためにもつていきたいのだとか、あいまいな話です。

お爺さんはかんがへながら答へました。

「できるにはできますが、二三日かゝりますよ。」

「えゝ、けつこうです。」

そして男は、金をさきにはらつておくといつて、金貨をそこにならべ、自分のすんでゐる所はいはず、たゞターマンといふ名前だけをしらせました。その間にも、たえず、店のなかをじろくみまはしてゐましたが、たうとうあきらめたやうでした。

「それでは、二日たつてからまたきますから、薬をたのみます。」
「承知しました。」

男はでていきました。

それと同時に、店のおくから、シロとクロがとびだしてきました。さきほどから、かげにかくれて、このありさまを見てゐたのです。シロとクロはお爺さんの両方の腕につかまつて、ニヤーニ

ヤーなきました。

「あの男ですよ。これからあとをつけていつて、どんな奴やつかつきとめてやりませう。」

さういつてるのが、お爺さんにはよくわかります。

「さうだな、あとをつけていつてごらん。」とお爺さんはいひましました。「用心しなければいけないよ。」

シロとクロは元気よくとびだしていきました。お爺さんは腕をくんで、じつと考へこみました。

夕方ちかくです。町には人通りがふえてゐます。外にとびだしたシロとクロが、すかしてみますと、その時、むかうに立ちどま

つてこちらをうかゞつてゐたらしいあの男が、くるりとむきなほつて、ゆつくりあるきだしました。シロとクロに気がついたのでせうか、それはわかりません。なにか考へるやうにうなだれて、ゆつくりあるいていきます。

シロとクロは、もののかげや人のかげをつたつて、できるだけ用心をして、あとをつけていきました。

やがて、男は横町にはいり、さびしい町にでました。しばらくゆくと、小さな寺がありました、その入口のかたすみに、まるい石がおいてありました。男はその石に腰をおろし、両手で頭をかへて、なにか考へこんだやうです。いつまでもうごきません。

シロとクロは、ある門のかげにかくれてみてゐましたが……き

がつきました。男は考へこんだふうをしながら、腕のあひだから、こちらをじつとうかゞつてゐるのです。そんなことにだまされるシロとクロではありません。たがひに顔を見あつて笑ひました。

あまりながくシロとクロがでてこないからでせうか、男はたうとう立ちあがりました。そしてゆつくりあるきだしました。もう、うしろをふりむきもしませんでした。

ながいあひだあるきました。右にまがつたり、左にまがつたりして、にぎやかな町にでました。りつぱな宝石や金銀などをうる店がありました。男はつとその店にはいつていきました。

シロとクロはすこしはなれたところにかくれてゐました。けれども男はでてきませんでした。買物にはいつたのでせうか、そ

れともそこが男の家なのでせうか。

シロとクロはこまりました。さうだんしました。

「いつてみようか。」

「気づかれるかも知れないよ。」

「どうせもう気づかれてるやうだよ。」

「さうだな。……あの男の家かしら。」

「つきとめてやらうよ。」

シロとクロは、そつと店のまへまでやつてきました。ところが、店の中には宝石や金銀の細工物がならんでゐますが、人ひとりゐず、あの男はもとより、店員もみえません。もう夕方なのに、あかりもついてゐません。うすぐらくてひつそりしてゐます。

「おれが中にはいつて、見てこよう。」とクロがいひました。

「うすぐらいし、おれはこのとほりまつ黒だから、だいぢやうぶだよ。」

シロをのこして、クロはそつとはいつていきました。

うまくいくかしらと、シロが表からうかゞつてゐますと、そのとたんに、ぱつと何か目をかすめて、次にがらくと、戸がしまつてしまひました。

シロはとびあがつてにげだしましたが、気をおちつけて、またそつとしのびよつてみますと、戸はしめきつてあつて、びくともうごきません。耳をすましても、戸のむかうはひつそりしてゐて、なんの音もしません。

ク口はとちこめられてしまつたのです。もうたぶんつかまへられてるかもしれません。あの男がしたのです。はじめからのことをかんがへると、うまくわなにかけたのです。

しめきつてある戸の前で、シロはながいあひだまちました。それからほろりと涙をこぼしました。それからお爺さんのところへとんでかへりました。

お爺さんはシロからすつかり話をきいて、首をひねつて考へました。そこへポン公もやつてきました。ポン公はお爺さんから話をきいてびつくりしました。——ターマンといふあの男がはいつていつた家は、トム商会といふ店で、いつも主人はるすで、三四人の店員があるきりです。ところがこんど、主人が航海中に海賊

におそはれて、多くの人たちといつしよに殺されてしまったとかで、町のむかうの丘の上の墓地に、石碑がたちかゝつてゐるさうです。

「ターマンとかいふあの男は、あやしい奴やつですよ。」とポン公はいひました。「それに、沖についてゐるあの船もあやしいんです。

これはきつと、なにかたいへんな事件ですよ。」

「うむ、わしもさう思ふ。」とお爺さんはこたへました。

とにかく、ターマンをよくしらなければなりません。クロもすぐひださなければなりません。さあいそがしくなりました。

けれどお爺さんの方は、薬をつくるのにいそがしいんです。ターマンがたとひどんな男であらうと、お金をうけとつてやくそく

した薬です。いろいろな草や木の根をこなにひき、それをまぜてねりあはせ、たくさんこさへなければなりません。お爺さんはそれにかゝりきりです。薬さへこさへておけば、ターマンがやつてきた時、なんとでもだんぱんのしやうがあります。

ポン公はシロをつれて、トム商会のまはりをうろつきましました。店には二人の店員が、雑誌をよんだりひそく話しあつたりしてゐるきりです。

みかげ石でできてる三階づくりのりつばな家です。表の窓ぎはや店のなかには、うつくしい宝石や金銀の細工物がならんでゐます。けれども、いつもふしぎにひっそりしてゐます。二階や三階には、人のゐるやうさへありません。ターマンはどこにゐるの

でせうか。クロはどうしてるのでせうか。

四 合図のメダル

二日めのことです。その家のよこのせまいあきちにはいりこみますと、ふいに、シロが大きな声でなきたて、そこらをかけまはりました。気でもちがったやうです。それから、そこにある一本のすゞかけの木によちのぼり、杖をつたつて、ぱつと、むかうの二階の窓口にとびつきました。窓にはよろひ戸がしめきつてあります。そのすみの方にシロはいつて、ポン公の方にニヤオと一声かけておいて、頭を窓のすみにおしつけながら、うづくまつてしまひました。

ポン公はあつけにとられました。たかい二階の窓口で、よろひ戸のしめきつてあるそのすみつこで、シロはどうするつもりでせうか。午後の日があたつてゐます。まるでひなたぼつこでもしてるやうです。いつまでもうごきません。ポン公はこまりました。シロの方を見あげながら、そのへんをぶらついてゐました。

やがて、シロはむつくりおきあがつて、ニヤーオとたかくなきました。ポン公はその下に走りよりました。シロは下におりたいやうです。だが、たかい二階で、とびおるのはあぶないし、つたつてきたすゞかけの枝には、窓の方からとびつくわけにはいきません。

ポン公はあたりを見まはしました。なんにもありません。しか

たがありません。ポン公は上着をぬいで、頭の上にかぶり、そこを手でたゝきました。

ポン公が足をふんばつてまつてみると、どすん……と、シロはうまくポン公の頭へ、それから地面へとおりました。

「あの窓口でなにをしてたんだ。」

「ニヤー、ニヤー……。」

シロのいふことは、ポン公にはわかりません。

いそいで、お爺さんのところへかへりました。

そして、お爺さんにシロが話したのは――

二階のあの窓のなかに、クロがあたのです。よろひ戸のはしに、すこしすきまがあつて、シロはクロと話をすることができたので

す。クロはぶじです。だいにじにされて、うまい食物たべものをあたへられてゐます。たゞ、その部屋にとぢこめられてゐるのです。部屋の中に、かべにつくりつけの鉄の扉とびらがあつて、その扉のあけかたをかぎわけると、ターマンがいつてゐるのです。扉にはかぎ穴が九つあります。鍵かぎはクロの首にぶらさげてあります。白髯の爺さんと話をしたり、手品つかひのたねになつたりするほどの猫だから、その鉄の扉のあけ方ぐらゐ、すぐわかるだらう。さうターマンはせめてゐるのです……。

「ほほう。」とお爺さんはいひました。「をかしなことになつてきたぞ。」

「するとあの男は、よその奴ですよ。トム商会の主人を殺した海

賊かもしれませんよ。」

「まあく、まちなさい。」とお爺さんはポン公をなだめました。
「クロはだいにじにされてるやうだし、もすこしやうすをみてからだ。」

そしてお爺さんは、またねり薬をこしらへにかゝりました。

約束の三日めの朝、ターマンはやつてきました。クロをとちこめておきながら、それは知らん顔をしてゐます。

「約束の薬はできましたか。」

「はい。」

ねり薬のはいつてゐる大きな壺つぼをまんなかにして、二人ともだ

まつて煙草たばこをふかしてゐます。ターマンは家のなかのやうすをじろ／＼見てゐます。お爺さんはそつぽをむいてゐます。

やがて、ターマンは薬の壺をかゝへて立ちあがりました。

「ぢやあ、もらつていきます。こんどまたなにか頼みにくるかも知れませんかから、その時はよろしく。」

「えゝどうぞ。」

ターマンは出て行きました。

ポン公は、お爺さんがターマンをとつちめないのが、しやくにさはりました。ターマンが出ていくと、自分もそのあとから、とびだしていきました。

ターマンは薬の壺をかゝへて、足ばやに歩いていきます。そし

てトム商会の方へは行かないで、海岸に出てしまひました。いつかターマンが釣つりをしてゐたところですよ。

海はしづかです。沖には、いくさうかの船からすこしはなれて、あのあやしい水色の船がついてゐます。

ターマンは壺をかゝへながら、海岸をぶら／＼歩きました。そしてポケットから何かとりだして、それを右手で、宙になげあげてうけとめてゐます。それをおもちやにしてあそんでるやうですよ。銅貨のやうなものです。

ポン公は目をみはりました。ターマンがおもちやにしてるのはメダルですよ。いつかターマンがおとしたのをひろつておいた、あのメダルとおなじやうですよ。ポケットに手をいれてみると、あの

メダルはちやんとあります。

「へんだぞ。おなじものがいくつもあるのかな。」とポン公はつぶやきました。

ポン公はなにくはぬ顔つきして、口笛をふきながら、近よつていきました。

「おや、をぢさんはへんな物をもつてるね。それ、僕に見せてくれない。」

ターマンはメダルを右手ににぎりしめて、じつとポン公の顔を見つめました。

「見てどうするんだ。」

「だって、僕がもつてるのとおなじなもの。」

「なに、おなじだつて。」

ポン公はなかばけんくわごしでした。ターマンがおとしたのをひろつた、そのメダルを、とりだして見せました。いまターマンがもつてるのとくらべてみると、まったくおなじで、表の数字もおなじ345です。

ターマンは、いきなりポン公の肩をつかまえました。

「君は、それをどこかでひろつたな。」

「ううん、もらつたんだよ。」とポン公は答へました。

「もらつた……誰からだ。」

「よそのをぢさんだよ。もう二三年になるかしら……。」

「どんな人だ。」

「どんなつて、ふつうの人だよ。だいじにもつてをれといつてくれたよ。そしていろんな用を僕にたのんだよ。」

「どんな用だい。」

「それは……いはれないや。誰にもいはないと、僕は約束したんだから。」

ターマンはおちついた顔つきで、ポン公をながめました。

「どうやら、ポン公のでたらめな話がとほつたらしいんです。けれど、これ以上のでたらめはあぶないやうです。ポン公は口をつぐんでしまひました。何をきかれても、いゝかげんなへんじしかしませんでした。」

ターマンは、こんどはやさしく、ポン公の肩に手をかけていひ

ました。

「そのメダルは、だいじなしるしになるものだ。しまつておけよ。そして、近いうちに、トム商会——あの大きな宝石屋を知つてるだらう——あすこの主人やそのほかの人たちの石碑が、丘のうへの墓地にたつことになるから、ぜひ君もその時にはやつてこいよ。ひよつとしたら、そのメダルを君にくれた人に、あへるかも知れない。」

「いつなの、その石碑がたつのは。」

「一週間ばかりのうちだ。きつとこいよ。」

その時、ポン公は気がつきませんでした。石垣いしがきのしたの海に、たくましい男が四五人のつてるボートが、こぎよせてゐまし

た。

「ぢやあ、またあはう。」

ターマンはさういつて、ポン公の肩をぽんとたゝいて、身がるにボートのなかにとびこみました。メダルをなげあげてゐたのは、そのボートをよぶあひづだつたかもしれません。

ボートはすぐにでていきました。見てゐると、水色の船の方へ、まつすぐに進んでいきます。やはりさうです。ターマンはあの船と、くわんけいがあるのです。だがあんなにたくさんのおきず薬をどうするのせうか。

ポン公はボートを見おろしてゐましたが、やがて、げんこで胸をたゝきました。目をかゞやかして、くちびるをかみしめてゐま

す。なにか決心したやうです。

ポン公は、トム商会の方へやつていきました。とちゆうで、チーズをすこしかひました。

店の中には、店員が二人あるきりでした。

ポン公はつかくといつていきました。

「僕はね、船からきたんだが、こゝに、黒猫があるさうだね。」
店員はだまつて、ポン公を見てみました。

「黒猫があるだらう。これを持ってきたんだ。すぐに黒猫にくはせなけりやならないんだ。いひつかつてきたんだ。案内してくれよ。」

そしてポン公は、345のメダルをとりだして見せました。

店員はびつくりしたやうに、そのメダルをとつてくはしくしらべました。

「ほんとに船からの使ですね。」

「さうだよ。またすぐ船にかへるんだ。いそいでるんだ。早く案内してくれよ。」

二人の店員はひそくさゝやきあひ、ポン公のからだぢゆうをしらべてから、一人がポン公を案内しました。ポン公は胸をどきつかせながら、店員について二階にあがりました。

二階のいちばんはじめの部屋でした。その扉とびらに大きな鍵かぎをさしこんで、店員はいひました。

「この部屋はだいいじな部屋ですから、中にはいつたら、またかぎをかけますよ。猫にそれをたべさせてしまつたら、扉をたゝきなさい。あけてあげます。」そしてきふに強い声で、「あやしいことがあつたらこれだぞ。」

腰をつゝかれたので見ると、ピストルをさしつけてるのでした。扉がひらきました。中にはいると、うしろからまた扉がしめられて、鍵をかける音がしました。部屋の中はうすぐらく、ポン公はぼんやりつつ立つてゐました。

五 ひみつの部屋の鍵かぎ

ポン公は、店員をうまくごまかして、ひみつの部屋にはいつた

ものの、中がうす暗いので、ぼんやりつつ立つてゐますと、ひくく猫のなき声が出て、そして、ポン公の胸にとびついてきたものがあります。クロです。そこにとちこめられてるクロです。ポン公はクロをだきしめました。そのうちに、だんく目^くがうす暗がりになれてきました。

部屋は、窓からすこしあかりがさしてるだけで、窓にはすつかりよろひ戸がおろされてゐます。まんやかに円テーブルと椅子^{いす}が一つあつて、円テーブルには、345のメダルがのつてゐます。ポン公は窓の方へとんでいきました。窓はしめきつてあります。にげだすことはとてもできません。

ポン公はあきらめて、持つてきたチーズをクロにやりました。

クロはそれをたべようとししないで、しきりにポン公をひつぱり
ます。見ると、そこのかべの一方に、一メートル四方ばかりの鉄
の扉が、はめこんであります。ターマンがあけたがつてる扉です。
クロの首に、小さな銀の鍵がさがつてゐます。

ポン公は鍵をとりました。扉には1から9まで番号のついてる
かぎ穴があります。クロはしきりに9のかぎ穴を足でかきます。

「これだな。」とポン公はさゝやきました。

ところが、鍵をさしこんで、くるく／＼やつても、扉はあきませ
ん。でもいそがなければなりません。部屋のそとには、ピストル
をもつてる男が待つてゐます。ポン公はじれだして、なんども鍵
をまはしてゐるうちに……あきました。扉があきました。だけど、

中にまた鉄の扉があります。1から9までのかぎ穴がついてゐます。クロは2のかぎ穴を足でかきます。ポン公はそれに鍵をさし入れましたが、こんどはあきません。なんと鍵をくるくくやつてもあきません。

部屋の扉が、外からどんくたゝかれました。

ポン公はあわてました。さいしよの扉をしめますと、ひとりのにびーんと、錠がおりてしまひました。

また部屋の扉がどんとたゝかれました。

「今日はだめだ、こんどまたくるよ。」とポン公はクロの首に銀の鍵をかけてやりながらいひました。「もすこし、しんばうしてゐておくれよ。」

クロはポン公の首にすがりつきました。

部屋の扉がすこしひらかれました。男がピストルをさしつけてゐます。

「早くしないか。」

「うむ、もうすんだよ。」

ポン公がおちついて出てくると、男はクロを部屋のなかにおひやつて、扉をしめてしまひました。

ポン公はまた、二人の男からくはしくからだをしらべられました。

思ひきつたあぶない冒険でしたが、そのかひがありました。ポ

ン公は白髯の爺さんにすつかり話しました。たゞさいしよの扉をあけるのに、なんと鍵をまはしたか、あわててゐたのでそれがわかりませんでした。

「まあいゝよ。」とお爺さんはいひました。「はじめの扉が、9のかぎ穴で、なんどか鍵をまはし、次の扉が、2のかぎ穴と……それだけわかればなんどか考へのがかりになる。それはきつと345のメダルにもくわんけいがありさうだ。わたしがひとつそのなぞをといてみよう。」

お爺さんは、もうそのことばかり考へてゐます。

ポン公の方は、時々シロをつれていつて、窓からクロとれんらくをとらせなければなりません。沖のあやしい船のみはりもしな

ければなりません。

ターマンはすがたを見せませんでした。

四五日たちました。

いつもひっそりしてるトム商会の店のなかで、今日はめづらしくにぎやかです。おほぜいお客がつめかけてあります。とくべつの売りだし日ださうです。なくなつた主人の記念に、どんな物でも半分のねだんでうるといふのです。

夜になると、いつそう多くの人がつめかけました。たゞ見物だけにきてる者もあります。店員らしくもない、へんにあらゝしい男たちが、宝石や金銀の細工物をたくさんならべて、ぶあいそ

に、あきなひをしてゐます。

二階も三階も、どの部屋にも、あかくとあかりがついてゐます。なにごとがあるのでせうか。

ポン公もおほぜいのお客にまぎれて、店のなかの様子をうかがつてゐます。もいちど二階のひみつの部屋にしるびこむつもりです。お爺さんが考へついた、あの鉄の扉をあける方法もきいてゐます。その方法はどうもたしかとはいへないやうですが、しかし、鉄の扉はあかなくても、クロを助けだしさへすればいゝんです。ところが、なか／＼うまくいきさうもありません。二階にあがつていくすきがないのです。たとひあがつていつても、部屋の鍵がわかりません。

ポン公はある店員のそばにいつて、そつと345のメダルを見せました。

「黒猫に食物をやらなけりやならないが、部屋の鍵はどこにあるんだい。」

店員はふしぎさうにポン公をながめました。

「黒猫、そんなものは知らないね。おれはいそがしいんだ。」

ポン公にはとりあつてくれないで、お客のあひてをはじめました。

ポン公はまた店のなかをうろつきました。外にでたりまたはいつてきたりしました。誰だれもあひてにしてくれる者がありません。

店のなかには、宝石や金銀の細工物、金貨や銀貨、話声やさげび声

……びか〜がや〜してゐます。

だん〜時間がたちます。ポン公はじれつたくなりました。

店の表の、入口の近くに、一人の若者がしやがみこんでゐました。いつまでもしやがみこんだまゝです。

ポン公は声をかけてみました。

「そんなところで、何をしてるんだい。」

若者は顔をあげました。酒によつてるやうです。泣いてるやうです。

「どうしたんだい。」とポン公はまたいひました。

「どうもかうもないんだ。おれはかなしいんだ。だから酒をのんだが、なほかなしくなつちやつて……。」

「なにがかなしいんだい。」

「おれはね、これでも、この主人にいちばんかはいがられたんだよ。その主人がなくなつて、記念の売りたてだらう。かなしくなくてどうするんだ。」

ポン公は目をみはりました。

「それに第一、あのターマンが気に入くはないや、かつてなまねばかりしやがつて、黒猫なんかひろつてきやがつて……おれがその黒猫のかゝりだつてさ。黒猫がなんだい、黒猫が……。」

ポン公は考へぶかさうにほゝゑみました。若者のそばにかぐみこみました。

「あゝあの黒猫か。すてちまへばいゝぢやないか。おれがすてて

やらうか。海にぶちこんでやるよ。おれにまかしておけよ。」

そしてポン公は、345のメダルを若者に見せました。若者はうれしさうな顔をしました。

「ほう、君は仲間だつたのか。ちやうどいゝや。どうとでもかつてにしてくれ。そら、これが部屋の鍵だ。」

ポン公は、とびあがらんばかりに喜びました。大きな鍵をうけとると、わざとそれをおほつびらにくるくうちふりながら、そして口笛をふきながら、家の者のやうなふうをして、店のなかをとほりぬけ、二階にかけあがつていきました。

見まはすと、だれも見てる者はありません。でもいそがなければなりません。ポン公はひみつの部屋の扉をあけました。中には、

電燈があかるくついてゐます。そこにあるのはクロだけです。

とびついてきたクロを、ポン公は胸にだきとりました。

さて、どうしてにげだしたものと、クロの頭をなでながら考へてるうちに、鉄の扉が目につきました。クロの首には、小さな銀の鍵がさがつてゐます。

「ようし、しらべてやらう。」

ポン公は銀の鍵をとりました。

メダルの数は345です。第一の扉は、3の三倍の9のかぎ穴です。鍵を三べんまはすと、あきました。白髯の爺さんがいつたとほりです。第二の扉は、4の三倍の十二、その十二から十をとつた2のかぎ穴です。鍵を四へんまはすと、あきました。次にま

た、お爺さんがいつたとほり、第三の扉があります。5の三倍の十五、それから十をとつた5のかぎ穴です。鍵を五へんまはすと、あきました。

ふかい鉄の箱です。くるくまいた厚紙などが、いつぱいはいつてゐます。それに手をかけようとすると――

「待て！」

大きな声でした。ポン公はぞつとすくみました。ふりむくと……ターマンが、ほほゑみながら部屋の中に立つてゐます。

「はゝゝ、たうとうあけてくれたな。ありがたう。だが、わたしは今日はいそがしいんだ。明日まで待つて^{あした}もらはう。話したいこともある。きのどくだが、今夜は、君をかへすわけにはいかない。

鍵はこつちにわたしたまへ。」

いつものターマンとちがつて、いかめしいやうすでした。ポン公は口もきけないで、銀の鍵をわたしました。ターマンは鉄の扉をしめました。

店のおもてにゐたあの若者が、毛布をもつてはいつてきました。「たうとうわなにかゝつたな、はゝゝゝ、まあゆつくりやすめよ。」

酒によつてはゐるやうですが、しつかりしてゐます。ポン公はくやしがりしました。だますつもりで、かへつてだまされたのです。もうどうにもなりません。毛布をもらつて、クロといつしよにとぢこめられてしまつたのです。

ターマンと若者は出ていきました。部屋の扉には錠がおろされました。

六 島の図と星の図

トム商会のうちは、今日はたいへんひつそりしてゐます。いつもよりなほひつそりしてゐます。店は休みです。若者が一人ゐるきりです。みんな出かけたのです。丘のうへの墓地に行つたのです。

なくなつた主人の石碑がたつのです。主人のばかりではありません。主人といつしよに死んだ人が、おほぜいあるさうです。それをみないつしよにして、大きな石碑がたつのです。

店には黒い幕がはりまはされてゐます。

そこへ、白猫のシロをつれて、薬屋の白髯の爺さんが、やつてきました。

シロのたんていで、すつかりわかつたのでした。ひみつの部屋のなかの鉄の扉があいたこと、そしてポン公もクロといつしよにとどこめられてること。

「そんなはずはない。」とお爺さんは考へたのでした。

お爺さんはきつとした顔つきをしてゐます。シロはぴんと尾をたててゐます。どちらもおこつてゐるやうです。

「ターマンさんにあひにきました。」とお爺さんはいひました。

若者は目をぱちくりさせました。

「おるすなら、かへられるまで待ちませう。」

若者はどうしてよいかわからない様子です。わからないから、かつてにさせておくことにきめたやうです。

お爺さんはシロをだいて、椅子いすにこしかけました。そして目をつぶりました。そのまゝじつとしてゐます。眠つたのでせうか、考へこんでるのでせうか。

おひるすぎになつて、ターマンがおほぜいの男をつれてかへつてきました。しほ風にふかれた、目のぎよろりとした、たくましい男たちです。中には、手足にかうやくをはつてる者もあります。お爺さんがこさへてやつたきず薬です。

お爺さんは、こしかけたまゝ、ターマンをじつと見ました。ターマンもお爺さんの顔をじつと見ました。

「あなたの薬は、たいへんよくきゝますね。」とターマンはいきなりいひました。

「なかくなほらなかつたきずが、このとほり、ぢきによくになりました。」

さういつて男たちをさししめました。

お爺さんはうなづきました。

ターマンは一人の男に、なにかさゝやきました。男たちはみんな二階にあがつていきました。

「さあ、ご案内ませう。」とターマンはいひました。

お爺さんはシロをだいたまゝ、立ちあがりました。

ばかにあつさりしたものです。おたがひに考へてることが、よくわかつてるやうなてうしです。それきり何ともいはないで、二人は二階にあがつていきました。

ターマンはひみつの部屋の扉をあけました。

ポン公とクロはびつくりしました。お爺さんが、シロをだいてはいつてきたのです。お爺さんはやさしくうなづいてゐます。ポン公は目にいつぱい涙をためました。シロとクロは、もう頭や身からだ体をなめあつてゐます。

ターマンは椅子をとりよせました。そして、扉をしめきり、窓をあけはなしました。

「じつは、あなたを待つてゐたのです。」とターマンは、お爺さんにいひました。「ひととほりお話ししませう。」

ターマンは、方々にできるいろくの品物を、売^{うり}買^{かひ}しながら、南洋にちらばつてる小さな島、人間のすんでる島や誰もゐない島を、探検してまはつてる男です。

ところが、ある日、ふいに海賊船におそはれました。

あひては甲鉄の船で、武器もたくさんあり、速力もまさつてゐます。けれどもターマンはおそれず、一生けんめい戦ひました。

幾人もたふれました。しまひにターマンの船は、敵の船によこづけにされました。

ターマンは船のいちばん底の部屋に、部下といつしよにかくれました。海賊たちはどつとのりこんできました。

その時です、用意しておいた火薬の樽たると石油の樽に、火をつけました。さいごの方法です。ものすごい音がして、空も海もまっくろになるほどのぼくはつがおこりました。そして大火事です。

海賊どもはおほかた死にました。味方もおほかた死にました。ターマンの船はしづみました。

けれども、ターマンはふしぎにぶじでした。生きのこつてる者といつしよに、もう海賊船にとびうつつてゐました。その船をぶんどりました。のこつてる海賊を降参させました。

その海賊船が、いま港の沖についてるあの水色の船です。海賊

のかしらはトム商会の主人だったのです。

生きのこつてる海賊の案内で、ターマンはこのトム商会へやつてきました。そして一同をあつめていひました。

「船の者たちはみなおれにしたがつてるから、こんどは君たちとの勝負だ。だが、きりあひをしてもつまらない。トランプで勝負をきめよう。」

トランプの札をとりだして、それをよくきつておいて、いきなり三枚ぬきだすと、それがクラブのしるしの3と4と5です。次に三枚、ダイヤのしるしの3と4と5、次に三枚、ハートのしるしの3と4と5、次に三枚、スペードのしるしの3と4と5……まるで奇術です。町の公園で、白髯の爺さんとシロとクロをごま

かした腕前です。海賊たちはびつくりしました。その上、345といふ数は、海賊たちのなかまのしるしのメダルについてる数です。

そこで、345のメダルのなかまの海賊たちは、おどろきおそれて、みな、ターマンにしたがってしまひました。

すつかり改心したのです。そして今では、海の上の戦^{たかひ}で、きずをうけた者も、お爺さんのきず薬で、たいていなほつてしまひました。戦で死んだ者たちのためには、墓地に石碑をたて、やつたところですよ。

海賊のかしらが、ひみつにしてゐた鉄の扉、誰にもあけることのできなかつたその扉も、猫とポン公とお爺さんのおかげで、

あくやうになりました。

「そこで、」とターマンはいひました、「あの鉄の扉のなかに、何がはいつてゐるかしらべてみませう。」

ターマンは銀の鍵かぎをとりだしました。

ポン公が三つの鉄の扉をあけました。

厚紙のまいてあるのが、いくつもはいつてゐます。ひろげてみると、地図でした。

「おう……これは……。」とターマンはさげびました。

くはしい地図です。南洋の島々のくはしい地図です。ターマンは目を光らせ、顔をかゞやかせました。

「すてきなものが手にはいつた。海賊がだいじにしまつてる物だ

から、宝石だの金銀のかたまりだの、どうせそんなものだらうと思つてゐたら、これはたいしたものだ。すてきだ。これさへあれば……。」

ターマンはとてもよろこんでゐます。その地図をたよりに、あの丈夫な海賊船でまた方々の島を探検にでかけるつもりです。

ターマンはりつぱな男です。ちゑもあり勇氣もあります。力もありさうです。

ポン公はこれまでのうらみもわすれて、ターマンを見あげました。お爺さんにもこにこしてゐます。

「僕も……探検についていきたいなあ……。」とポン公はつぶやきました。

ターマンはじつとポン公の顔を見ました。そしてにつこり笑つて、その手をにぎりしめました。

やがて相談がまとまりました。

ポン公はターマンについていくことになりました。クロもつれていくことになりました。白髯の爺さんが、シロといつしよに、トム商会をあづかることになりました。二三人の男が、店員にのこることになりました。

もう明日あしたにも出かけられます。その晩、お爺さんとポン公とをくはへて、ターマンの部下みんなで、さかんな宴会をひらきました。

そのあひだに、お爺さんとポン公は、シロとクロをだいて、二階の外廊下にでました。月がてつてゐます。きれいな月でした。

「シロとクロは、なんといつてるの。」とポン公はお爺さんにたづねました。

「元氣にいつておいで、とシロがいつてるよ。」

「クロの方は。」

「たつしやでるすをしておいで、といつてるよ。」

「わかれるのをかなしがつてやしないの。」

「かなしがるものかね。」

「さうかしら。僕は……お爺さんとわかれるのが、なんだかさびしいなあ。」

はゝゝゝ、とお爺さんは笑ひました。それからいひました。

「よいことがある。海にでると、星がたいへんきれいに見えるものだよ。そこで、星の名をかきいれた大空の図をお前にあげよう。面白いものだよ。そして、星をみて、さびしくなつたりかなしくなつたりしたら、心に勇気がなくなりかけたしようこだ。星をみて、うれしいたのしい気持ちになつたら、心に勇気がみちくゝてるしようこだ。いゝかい、勇気をなくしちやいけないよ。」

ポン公はふかくうなづきました。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系 第十六卷」ほるぷ出版

1977（昭和52）年11月20日初刷発行

底本の親本：「金の目・銀の目」アルス

1942（昭和17）年1月

初出：「幼年倶楽部」講談社

1937（昭和12）年1月～6月

入力：菅野朋子

校正：門田裕志

2013年2月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

シロ・クロ物語

豊島与志雄

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>